

みなさん、おはようございます。約1か月間の夏休みが終わりました。今日は、こうやって全校の皆さんの元気な姿を見ることができてうれしい、というか、ほっとしています。

夏休みを振り返ってみます。まず、農業クラブの活動は、各種発表県大会ではじまりました。準備・運営に携わってくれた皆さん、ご苦労様でした。そして、発表者の皆さん、どの発表も大変素晴らしかったです。また、果樹班の皆さんは、先日の四国大会をへて、10月の全国大会への出場が決まりました。本当にうれしく思います。精一杯頑張ってきてください。

また、平板測量のメンバーの皆さんも、愛媛県代表として活躍しました。この他にも、吹奏楽部の県吹奏楽部コンクールでの演奏も素晴らしいものでしたし、各部活動の大会、地域でのボランティア活動や現地実習、中学生一日体験入学、体育祭準備、それから、3年生にとってははいよいよ始まる就職活動、入試の準備、などなどきりがありませんが、どの活動も、暑さのなか、粘り強く取り組んでくれたと思います。

さて、今日は、最近、私が疑問に思っていたことについてお話ししたいと思います。ここ最近、1年という時間がどんどん短く感じるんですね。何でだろう、と思って、先日、ネットで検索しようと、「歳をとると」と打つと、次の文字の候補のトップに「1年が早い」と出て来てびっくりしました。そして、この感覚には、法則名まで付いているそうです。

話は変わりますが、先日、私は、茂木健一郎（もぎけんいちろう）さんという方の講演を聞く機会がありました。茂木さんは、世界的に有名な脳科学者の第一

人者で、テレビでもよく見かける方です。その、茂木さんの話の中で、何と、私が最近疑問に思っていた、「人は歳を重ねるとなぜ時間の感覚が短くなるのか」について述べられていたんですね。彼は、こんな風に言っていました。「経験の少ない小さな子供は、日常的に新しい挑戦をしていて、ひらがなや九九を覚えたり鉄棒や跳び箱に挑戦したりすると、脳からドーパミンという物質が出て、脳は活性化される。一方、経験が豊富な大人は、結果が予想できてしまうので、実際に行動しなくなってしまう。すると、振り返っても何も残らない時間になってしまう。子供の時に誰もが持っていた、わくわく感とチャレンジ精神を持ち続けることが、脳のメンテナンスにはとても重要なんだ。」と言うんですね。

茂木さんの話を聞きながら、このことに共感できることがありました。チャレンジすることで、一日一日が記憶に残る、ということを実感することが最近あったのです。昔から、私は、字をきれいに書ける人がうらやましい、と思っていました。自分もうまくなりたい、と思ってはいたものの、恥ずかしながら、これと言って努力はしていませんでした。しかし、今年になって、ついに重い腰を上げ、時間を見つけてペン習字の練習をしています。お手本を横に何度も書いて、コツを掴んでくると、これが結構面白いんですね。今までは全く気にしなかった、文字の止めや、はらいの方向が気になってきます。

「面白いから一生懸命やるんじゃない、一生懸命やるから面白いんだ」この言葉は、私の好きな言葉です。先ほど、重い腰を上げた、と言いましたが、新しいことにチャレンジすることで、自分の成長や、時間の大切さを感じることが出来ていると思います。

最後になりますが、先ほど話した脳科学者の茂木さ

んは、チャレンジすることについて、講演会でこのように付け加えていました。それは、「チャレンジするためには、自分は失敗しても大丈夫、という、安全地帯の中にいることが重要だ」というのですね。なるほど、と思いました。皆さんにとって、クラスは、部活動は、学校は、家族は、失敗しても大丈夫な安全地帯でしょうか。人が成長するためには、「私、失敗しないので」と自信を持っていることよりも、むしろ「私、失敗しても大丈夫」と思えることのほうが大事なのかもしれません。

今日から始まる2学期は、様々な学校行事が予定されています。体育祭で、農業祭で、お互いのチャレンジを後押ししてくれるような雰囲気になることを願っています。特に3年生の皆さん、いよいよ就職活動、入学試験が控えていますね。仲間と支えあって、準備は念入りにして、そして本番は楽観的に迎えて、いい結果を手にすることが出来るよう祈っています。

さて、今日から2学期がスタートします。終業式の時、2学期を振り返って「充実した、長い4カ月だったなあ、」と思える毎日を、お互い過ごしましょう。以上で、私の話を終わります。

